ブラジル、ポルトガル語話者の日本語作文「南米殺戮」の分析

馬場　良二

0. はじめに

「南米殺戮」で、まず思い浮かんだのは、ヤノマミだ。ヤノマミは、ブラジルとベネズエラとの国境付近の広大なアマゾン熱帯雨林に住む先住民族で、現在の人口は、16,000 から 35,000 人と言われている。彼らの地で金鉱が見つかり、1987 年から採掘者とヤノマミの間に摩擦が起きた。まず、ハシム村の四人が殺され、村人たちは、報復の儀式で採掘者二人の命を奪った。そして、1993 年、採掘者たちは、ハシムの村を焼き、16、あるいは、73 人のヤノマミを殺した[i]。

しかし、著者が言いたいのは、そうではなくて、コロンブス以来、南米先住民が殺され続け、文化を蹂躙されている現実だ。

学習者は、「心の叫び」を日本語にしてくれた。手をつくして分析し、その声を真摯に受けとめようと思う。

1. 著者について

馬場（2019）の分析した作文の著者と同じく、ブラジル連邦大学文学部日本語科の学生で、作文を書いたとき、3 年生だった[ii]。門脇（2014）に第 3 課「歴史的な経過の説明」があり、これを使った作文の授業で、「南米殺戮」を書いている。

彼は、母方の祖父が先住民の息子で、父方の祖父がアフリカ系だ。母方の祖父が亡くなった 11 歳の時に問題意識を持ちはじめ、文学部に入って社会的マイノリティーを擁護する活動家の影響を受けた、「静かな活動家」だ。そして、「心に響いていたテーマを選び」、「本当に自由に書きました」と言う。

2.「本当に自由に書きました」

例えば、「土人[iii]」だ。差別的な語だということを知っていて、学生と教師

南米殺戮

コラーシス・ルーカス

南米殺戮とは米州植民時代において大虐殺である。欧州からの白人が大航海時代に米州海域へ到達して、米州が欧州の植民地ともて思われるようになった。さらに、米州土人が奴隷にされ、無数が殺された。欧州人の利害関係ものの熱数限りない土人が倒れた。

このように、命だけではなく、文化、言語などが土人達に盗られてきた。これは南米に限らない、中米、北米、いいえ、大航海時代が目指して全ての国において行われたものである。近現代にその結果はなかなか社会に植え込まれたものである。このヨーロッパに弾圧された世界が現代までこのままで引き続いている。

第二次世界大戦よりユダヤ人のホロコーストは非常に伝われるが、インディアンのホロコーストはよく脇に置いているものである。今日も米州土人の文化は欧州人より弱いという感覚が、地方によって、強とうから、インディアンの文化を大事に伝達しなければならない。他の文化を比べるわけではないが、インディアンが、拓殖のせいで限界外として存在している。ブラジル文化には、インディアンの伝統的な語彙や食べ物などがいっぱいあるから、1492年前の世界に考えながら、米州土人の文化に興味をもとろうとしている。

図1　日本語学習者による作文「南米殺戮」（写真）

を驚かせるために意図的に使ったと言う。メールのやり取りで、「白人のポルトガル人が índio という名前を付け、今日までその言葉を使っていますね。それは私にとってすごくひどいです。かれらはインドの人々ではないです」と言ってきた。だから、調べて、考えて、ちりばめたのだ：土人（ネイティブ）、インディアン、米州土人（インディアン）。「ホロコースト」を先住民のことに使ったのも意図的だ。

魂が叫んでいる、「「どうやってこの人たちを呼んでいいかな」という質問は、大抵先住民に聞くより、その圧制者に聞きますね」、「今日までインディアン、野蛮、土人、赤肌（北米の方）、いろんな名前を付けます。彼ら

1　南米殺戮（発見）
2　氏名
3　南米殺戮とは米州植民時代において大虐殺
4　である。欧州からの白人が大航海時代に米州
5　海域へ到達して、米州が欧州の植民地として
6　思われるようになった。さらに、米州土人（ネイティブ）が
7　奴隷にされ、無数が殺された。欧州人の利害
8　関係ものの為数限りない土人が倒れた。
9　このように、命だけではなく、文化、言語
10　などが土人達に盗られてきた。これは南米に
11　限らない、中米、北米、いいえ、大航海時代
12　が目指して全ての国において行われたもので
13　ある。近現代にその結果はなかなか社会に植
14　え込まれたものである。このヨーロッパに弾
15　圧された世界が現代までこのままで引き続い
16　ている。
17　第二次世界大戦よりユダヤ人のホロコース
18　トは非常に伝われるが、インディアンのホロ
19　コーストはよくわきに置いている（こんにち）ものである。
20　今日も米州（インディアン）土人の文化は欧州（ヨーロピアン）人より弱いとい

21　う感覚が、地方によって、強そうから、イン
22　ディアンの文化を大事に伝達しなければなら
23　ない。他の文化を比べるわけではない。けれ
24　ども、インディアンが、拓殖のせいで限界外（マージナル）
25　として存在している。ブラジル文化には、イ
26　ンディアンの伝統的な語彙や食べ物などがい
27　っぱいあるから、１４９２年前の世界に考え
28　ながら、米州土人の文化に興味をそそろうと
29　している。

図２　日本語学習者による作文「南米殺戮」（打ち直し）

原稿用紙の使い方に問題がある箇所には、波線、文法的な記述をくわえた箇所には、傍線を引いた。そして、形に言及した文字をで囲んだ。

は índio ではない。かれらは guarani, ticuna, ianomâmi, kaingang[iv]」。

「殺戮（発見）」、「土人（ネイティブ）」などのフリガナは、日本語教育では扱わない。指導するのは、漢字の読みだけだ。これも、「自由に書いた」のだろう。

3. 表記

非漢字系の学習者なのに、漢字がふんだんに使われ、一つ一つの字が丁寧に書かれている。

原稿用紙の使い方では、27 行頭の「っ」だ。26 行最後のマス目に「いっ」といれるべきだった。あとは、氏名と本文との間が詰まった感じがすることと、縦に並んだ「１４９２」だろう。しかし、後者を「一四九二」にすると、なんだかしかつめらしくなる。

平仮名では、「ら」が気になる。4 行の「欧州からの」の「ら」（図 3 を参照）だけを見ると、隙間のある「５」にも、癖のある「う」にも見える。

11 行の「航」と 26 行の「物」は画が足りない。5 行の「達」は書けているが、10 行、22 行では、頭の部分が点になってしまっている。これらは、訂正し

図3　字形の訂正

図4　部首「士」について

たほうがいいだろう。

13行の「結」が、「士」ではなく、「土」になっている。これ一つなら、放っておいてもいいかもしれないが、7行の「隷」、15行の「続」もだ。漢字の部首には、「土」しかないと思っている可能性がある。だとしたら、放っておくわけにいかない。

他に、タイトルの「南」の頭の部分が「十」でない、同じく「戮」が「羽[v]」でない、22行「事」の頭が突き抜けていない、24行「外」のバランスが悪い、などがある。しかし、一般的な日本人の書く漢字のことを考えれば、これらを訂正する必要はないように思う。

図5　字形について

4. 漢字語：米州、拓殖、利害関係者、限界外（マージナル）

「米州」は、意味は分かるが、使わない。手持ちサイズの辞書には見当たらず、新村（1998、p.2393）、尚学図書（1981、p.2146）の見出し語にあり、どちらにも例として「米州機構」があげられている。同じつくりの語でも、「欧州、豪州[vi]」は見慣れているが、アジア、アフリカの「亜州、阿州」は見慣れない。「米州」は、その中間だろうか。ポルトガル語で「アメリカ合衆国」は「os Estados Unidos」、「アメリカ大陸の国々」は「os paizes Americanos」と、形がまったく異なる。著者は、「米国」に対する語として「米州」を使ったのだろう。

山田（2016、p.914）によると、24行「拓殖」は、「〔未開の外地などを〕開墾し植民すること」で、文脈に合っている。しかし、耳慣れない。日本人が一般に使う語なら、「開拓」、「植民地化」が適当だが、これだと、「開墾、開拓」と「植民」の両方の意味をあらわすことができない。著者は、ぴったり合う語を探し、「拓殖」を見つけたのだろう。

池上（1996、p.675）の「interesse」の語義には、❶「利益、得」、❸「利害関係、利権」がある。Aurélio（2010、p.1173）の「interesse」には、「1. Lucro material ou pecuniário（物質的、金銭的利益）」、「11. Relação de reciprocidade entre

um indivíduo e um objeto que corresponde a uma determinada necessidade daquele（ある個人と彼のある特定の必要に対応する物件との間の相互関係）」がある。❶は 1. に、❸は 11. に対応する。ただ、11. が対応するのは、❸の「利権」だけであって、「利害関係」には対応しない。11. が言っているのは、人と物との関係だが、「利害関係」は物をめぐる人と人との関係だからだ。池上（1996）の記述は、間違っている。著者は、「利権」の意で 7-8 行「利害関係」と書いたに違いない。間違っている資料を参考にした可能性がある。

著者に確認したところ、「利害関係もの」の「もの」は、「厄介者」、「無法者」、「親不孝者」、「果報者」、「働き者」などの「者」だ。「利権をむさぼる輩」という意味を込めたのだろう。また、「利害関係ものの為」の「ため」は、山田（2016、p.937）の「ため」にある形式名詞的用法の「㊁その物事が原因・理由であることを表わす」用法だ。この意味では、「－によって」の方がわかりやすい。

フリガナにあるように、著者は、「marginal」の意味の語として 24 行「限界外」と書いたのだろう。意味は、分かるが、この語は存在しない。Aurélio（2010、p.1341）の「marginal」の 6. は「*Bras*. Diz-se de pessoa que vive à margem da sociedade ou da lei como vagabundo, mendigo ou delinquente（ブラジルで。放浪者、乞食、犯罪者のように社会や法律の margem に生きる（人）」で、「margem」は、「欄外」であり、社会や法律の「外」なのかも知れない。池上（1996、p.768）の「marginal」❺は、「《ブ》社会の周辺に生きる」だ。著者は、「周辺」では満足できず、「限界」に「海外、県外、校外、門外、圏外」の「外」をつけたのではないか[vii]。

5. 格助詞、副助詞、「は」

格助詞、複合格助詞の使い方で間違いと言えるのは、23 行「他の文化を比べるわけではない」の「を→と」、10 行「土人達に盗られた」の「に→から」、3-4 行「南米殺戮とは米州植民時代において大虐殺である」の「－において→－においての／における」ぐらいだ。

13-14 行「近現代にその結果はなかなか社会に植え込まれたものである」は、「近現代において」の方が落ち着く[viii]。一つの述語に同じ格助詞が二度かかるからだろう。だが、「近現代に」は時を表し、「社会に」は動詞「植え込む」が要求する補語であって、二つの用法は、異なる。基本的に、用法の異なる

格助詞は、一つの述語に同時にかかりうる。この考え方だと、13-14 行は、文法的だ。日本語の文法規則に従っているが、美しくないということだ。

格助詞「に」の同義語には、「において」以外に、「－に対して抗議する」、「－によって反対される」などの複合格助詞が存在する。これらの役割は、意味、用法を明示することにある。効果としては、文体がかたくなる、同一文中における格助詞「に」の重複を避けることができるなどがある。では、具体的に、どのような場合に、意味、用法を明示する必要があるのか、あるいは、格助詞の重複を避けねばならないのか。今のところ、明確な指針はない。著者の日本語力は高いので、一緒に検討することができるだろう。また、「資本主義という思想は近現代に現れた」だと、不自然さが感じられない。「近現代に」が述語に近ければ、落ち着くのか。だとしたら、どれだけ離れたら、「において」にすべきかが、問題となる。

23 行で言いたいのは、「先住民の文化を他の文化と比べるわけではない」であり、文型は「A を B と比べる」だ。これは、ポルトガル語の「comparar A com/a B」に対応する。「comparar（比べる）」が動詞で、A は直接目的格を取り、B は前置詞「com」、あるいは、「a」を取る。「なぜ「他の文化と」ではないのですか？」と問うと、「そうです！「と」です」と返ってきた。

10 行の能動文は「（白人が）土人達から文化、言語などを盗ってきた」で、これが受け身になっても「土人達から」の格は、変わらない。格が変わるのは、動作主で、「白人」のガ格は、受け身でニ格となる。著者に、なぜ「土人達に」としたか尋ねると、「この「に」は、そのとき受身形の文章を勉強していましたから「に」を使いました。「に」を使う理由はなかったのです。今読むと「から」の方がいいですね！」ということだ。

大雑把に見ると、言語は、述語と補語、そして、それらに係る連用修飾語句と連体修飾語句でできている。3-4 行の間違いは、「米州植民時代」が補語「大虐殺」を連体修飾しているのに、述語「大虐殺である」を連用修飾する形式「米州植民時代において」を使ってしまったことによる。複合後置詞「において」に後置詞「の」を後接させ、「においての」とするか、別の後置詞「における」を使うべきである。著者自身も、「この「において」は確かに間違っています。そのとき「において」「における」という文法はまだ新しい文法で、まだなれていませんでした」と言っている。

Rodriguez[ix]（1608、第 140 葉表。ロドリゲス、1955 の p.508）は、「HVNS

ARTIGOS POSPOStos a outros.（他の格辞に対して後置される或格辞）」という節を設け、助詞が二つ重なった言い方[x]を「elegante」だとしている。著者にとって、「においての」は、思い及ばない言い方だったのかもしれない。

一方、4行では、「欧州(ヨーロッパ)からの白人が大航海時代に」と書いている。著者の日本語力の高さがうかがえる。

6-7行「米州土人(ネイティブ)が奴隷にされ、無数が殺された」。間違いとは言えないが、「無数」に格助詞「が」は、つきにくい。無難なのは、「無数の米州土人が奴隷にされ、あるいは、殺された」だろう。「二人」なら、「二人の学生、学生二人が、学生が二人」と、ノ格をとって名詞を修飾することも、ガ格をとることも、副詞的に使われることもある。「多く」は、「多くの学生、学生が多く」と、使える。しかし、同じ数量を表す「無数」だが、ノ格をとって、ガ格をとらず、副詞的用法もないようだ。

5-6行「米州が欧州の植民地として思われるようになった」は、「と」の方がいいように思う。ただ、文法的な間違いとは言えない。著者は、当時、「として」を習いたてで、「まだなれていませんでした。そのとき自信もあまりありませんでした」と言う。

17-18行「第二次世界大戦よりユダヤ人のホロコーストは非常に伝われるが」の「より」は、時間の起点を表している。典型的には、「5時より始めます」、「幼少より」など時を表す語を受けるのだが、「第二次世界大戦」や「大統領は、来日より、京都に滞在している」などのように、コトを受けても構わない。ただし、小矢野（2014、p.657）に「古語で「いづくより」「明日より」のように空間・時間の起点を表す用法や「AはBよりなる」のような構成要素を表す用法は現代語の格助詞カラと交替できるが、ヨリは書き言葉に傾き、カラを使うほうが一般的である」、とあるように、「乾杯よりもう酔っている」、「入学式より髪の色を変えた」は、「から」の方が合っている。

ポルトガル語で時間の起点を表わす前置詞は、「de、desde」で、「から」と同様、前者には、意味、用法が多い。だから、「第二次世界大戦より」は「da[xi] Segunda Guerra Mundial」か「desde a Segunda Guerra Mundial」となるが、前者だと、「de」のどの用法か迷うこともあろう。しかし、後者であれば、必ず「時間の起点」を表す。著者は、「desde」の訳として、「より」を使った可能性がある。

20行の「今日(こんにち)も」は、「今日(きょう)も晴れている」の用法だろう。過去のこと、

きのうのことが言外の前提になっている。しかし、20 行は、「今日(こんにち)でも」の方が落ち着く気がする。この「でも」は、副助詞で、山田（2016、p.1039）の「㊀許容される最低の場合を例示し、他の場合も同様であることを暗示する。「子どもの足－十分あれば行ける／忙しくて、日曜日－遊んでいられない／今から－遅くない／これだけ－持っていきなさい」の意味を持つ。

驚いたことに、「は」の間違いが見当たらない。気が付くのは、21 行「地方によって<u>は</u>」、24 行「インディアン<u>が</u>」→「<u>は</u>」くらいだが、これらを訂正する必要はないだろう。

20 行以降は、意味が取りにくい。そこで、解釈を送り、著者に確かめた。

> 地方によって、あるいは、人によって、「アメリカ先住民の文化は、ヨーロッパの文化より劣る」という感覚が、今でも強いようだ。だから、先住民の文化をきちんと多くの人に知らしめなくてはならない。他の文化と優劣を競うわけではない。しかし、ヨーロッパ人の植民政策のおかげで、先住民が社会のなかで疎外された存在であるのは事実だ。ブラジル文化には、先住民の伝統的な語彙や食べ物などがいっぱいあるから、1492 年以前の世界に思いをはせながら、アメリカ先住民の文化に興味を持ち続けようと思う。

これで、いいと言う。

だとすると、20-21 行では、「今日も米州土人の文化は欧州人より弱いという感覚が、地方によって<u>は</u>、強そうから」と、「地方によって」をとりたてる方法もあり得る。

また、ずっとインディアンについて話しているのだから、24 行「インディアン<u>が</u>、拓殖のせいで限界外として存在している」は、「は」の方がいい。ただ、著者が言いたいことが「インディアンが疎外されている」という事実なのであれば、「が」はそのままで「インディアンが、拓殖のせいで限界外として存在している<u>のは、事実だ</u>[xii]」と補うべきだ。

6. 語句

9-10 行「命だけではなく、文化、言語などが土人達に盗られてきた」で「文化、言語を<u>盗る</u>」というのは、なじまない。「盗る」には、個別的、具体的なニュ

アンスがあるようだ。ここでは、「他に所属するものを、権力・武力などに任せて取り上げる」[xiii] 意の「うばう」が適している。

13 行「なかなか」は、不自然だ。山田（2016、p.1116）「なかなか」の語義㊀は、「実際に見聞した対象の程度が予期していた以上で、軽視しがたいと感じられる様子」であり、著者は、まさにこの意味で使っている。「あいつは、なかなかやるね」と同様だ。しかし、「なかなか」は、基本的に、評価に対する程度副詞であり、13-14 行には、評価する語がない。「近現代にその結果はなかなか深く社会に植え込まれた」のように、評価の語「深く」をいれると、整うようだ。

13-14 行「植え込む」で、「植える」は、ポルトガル語「plantar：植える、根付かせる、導入する」をイメージしたのだろう。「込む」は、山田（2016、p.541）によると、「徹底してその事を続け、当面の目的が達成されるようにする」の意を持つ。著者は、この二つをうまく組み合わせている。しかし、聞きなれない。「根深い [xiv]」としては、どうだろう。

28-29 行「米州土人の文化に興味をそそろうとしている」とある。山田（2016、p.876）で、「そそる」の語義は、「ある事がきっかけとなって、反射的に感情・行動を起こさせる」である。著者自身は、まさにこの意で使ったのだろう。しかし、「そそる」の格支配は「モノがヒトの興味をそそる」であって、「ヒトがモノに興味をそそる」ではない。だから、28-29 行は、非文だ。興味を持った後、持続する意を加え、ありふれた言い方になってしまうが、「アメリカ先住民の文化に興味を持ちつづけようと思っている」と訂正する。

27 行「1492 年前」だと、西暦 525 年ごろになる。これは、「1492 年以前」と言いたかったのだ。前者は「há 1492 anos que」（英語に直訳すると、it has 1492 years that）、後者は「antes de 1492」（before of 1492）で、形式がまったく異なる。ポルトガル語で形が異なるものが日本語で似た形となり、間違えてしまったのだろう。理由は分からないが、著者は、「「以前」「以上」「以下」はとてもむずかしい」と言う。

7. 母語の影響

5-6 行「米州が欧州の植民地として思われるようになった」、27-28 行「１４９２年前の世界に考えながら」は、「みなされる [xv]」、「を思いながら」とすべきだ。日本語の「思う、考える、みなす」の使い分けは、むずかしい。

これらの語と意味の近いポルトガル語に「pensar、achar、refletir、considerar」があるが、このうちの「pensar、refletir、considerar」は、思考対象が前置詞「em」をとる。ポルトガル語の前置詞「em」は、多くの場合、日本語の格助詞「に」に対応するため、27-28 行「世界に考えながら」になったと思われる。

11 行に「いいえ」がある。否定を示すということでは、「いいえ」も「いいや」も意味が同じで、ポルトガル語で「não」だ。しかし、ここでは、南米、中米、北米だけでなく、「大航海時代が目指して全ての国」でそこの住民が迫害されたことを強調している。「いいえ」にこの用法はなく、「いいや[xvi]」でなければならない。

21 行「地方」は、ポルトガル語「região」のことだろう。「地方」には何らかの基準によった「区分」の意味がある。「地方」のままでもいいが、「地域」という語があることは、おさえたい。

15 行「このまま[xvii]」の「この」は、「その」であるべきだ。コソアの使い分けは、現物指示か文脈指示か、文脈指示なら独話か会話かで、変わる。この場合は、一人の話者による語り、文脈指示で、「この」だと話者自身の状態を支持してしまう。ここでは、「このヨーロッパに弾圧された世界」の状態を支持しているので、「その」であるべきだ。ポルトガル語では、「このまま、そのまま、あのまま」どれもが「assim[xviii]」であり、言い分けをしない。著者は、「このヨーロッパ」に合わせたのだろう。

「このままで」の「で」は、ない方がすっきりする。「このまま」は、指示詞と名詞の連語で、副詞として機能する。一方、「このままで」は、「このまま」に断定の助動詞「だ」の連用形が接続したものだ。だから、「このヨーロッパに弾圧された世界が現代までこのまま引き続いている」は一文で、「このヨーロッパに弾圧された世界が現代までこのままで引き続いている」は二つの文が連なっていることになる。文意に違いは見られないが、著者が意図するのは、多分、前者だろう。

20 行に「文化が弱い」という表現が見られる。言いたいことは、分かるが、日本語では、言わない。一方、ポルトガル語で「cultura fraca（弱い文化）」は、「遅れた、劣った文化」という意味となる。

8. ヴォイス

18 行目「伝われる」は、「つたう」に助動詞「れる」が接続しているか、

あるいは、「つたわる」が可能動詞になった形だ。そうではあるが、文脈から、著者が言いたかったのは、「つたえる」に受け身の助動詞「られる」が接続した「つたえられる」だろうと考えた。意味、用法と形の似通った動詞が三つあり、受け身の助動詞には「れる、られる」の二つがある。さらに、五段動詞には、可能動詞があって、混乱したのだ。

しかし、著者は、「「伝われる」は「自動で歴史がこんなことを人にいう」を書きたかった」と言う。「つたう」に自発の助動詞「れる」を接続させたのだ。これは、形態論的にも意味論的にも正しい判断だ。教えられたとおり、あるいは、文法書にある通りの日本語を書いたと言える。でも、自発というのは、話し手の思考、感覚を表す場合に使われ、「れる、られる」がつくのは、「思う、くやむ、しのぶ、聞く、見る、感じる」などの限られた動詞だ。「自然に伝わる」の意で「伝われる」とは、言わない。

17-19 行「第二次世界大戦よりユダヤ人のホロコーストは非常に伝われるが、インディアンのホロコーストはよくわきに置いているものである」の「置いている」は、間違いではないものの、「置かれている」の方が日本語らしい。ユダヤ人のホロコーストとインディアンのホロコーストとで、「伝えられる」、「置かれている」とヴォイスが揃うからだ。

9. その他

著者は、作文冒頭で「南米殺戮とは米州植民時代における大虐殺である」（「おいて」を「おける」に訂正）のように、「南米殺戮」を定義している。筑波大学日本語教育研究会（1983、p.11）の[1]「名・分類・定義」、Ⅲには、定義の文型として、「月刊誌**というのは**、毎月一回出る雑誌**のことです**」、「「季語」**とは**、俳句の、季節をあらわすことば**である**」などの例文があげられている。冒頭の一文は、後者の文型をなぞっている。定義であることをはっきりさせるなら、「－というのは－のことである」という文型を使うといい。

ヨーロッパ系の言語話者は、20-21 行「米州土人の文化は欧州人より弱いという感覚」のような連体修飾を発想しづらい。修飾句が被修飾語の「内容」を表すことがないからだ。グループ・ジャマシイ（1998、p.296-297）には「という」の用法として、「この会社には、仕事は五時までだという規則がある」、「弟が大学に合格したという知らせを受け取った」、「たばこの煙が体によくないという事実はだれでも知っている」などの例が挙げられている。著者は、

この「という」を適切に使って、被修飾語「感覚」の内容を言語化している。

12-13 行「行われたものである」、13-14 行「植え込まれたものである」、19 行「置いているものである」の下線部分は不必要に思われる。著者に確認すると、12 行「もの」は、「これ」、つまり、「土人達から奪うこと」を、14 行は、「その結果」、つまり、「収奪、殺戮の結果」を、そして、19 行は、「ホロコーストについての話」を受けている。著者は、「もの」をいれたのは、強調のためだと言う。あっても強調の効果は望めないし、削除した方がすっきりする。

21 行「強そうから」は、「強そうだから」の誤りだ。

著者によると、11-12 行「大航海時代が目指して全ての国において行われた」では、「大航海時代が目指した全ての国において行われた」と言いたかったのだという。だとすると、「5. 格助詞、副助詞、「は」」で触れた 3 行「において」と同様、連体修飾と連用修飾とを取り違えたことになる。原文のままなら、「これ（略奪）は、大航海時代が（これを）目指して、全ての国において行われた」と解釈される。この場合は、「目指して」の次に、読点を入れると、理解しやすいだろう。なお、物理的に、「時代が国を目指す」ことはないが、表現として、適切だ。

9-10 行「このように、命だけではなく、文化、言語などが土人達に盗られてきた」の「このように」は、前段の「数限りない土人が倒れた」を受け、そして、「命だけではなく、文化、言語などが土人達に盗られてきた」全体にかかる。しかし、文脈から見て、「このように」がかかるべきは、「命だけではなく」だけだ。「このように、命が奪われただけではなく、文化、言語なども[xiv]土人達に盗られてきた」のように、「命」と「文化、言語など」それぞれに述語を用意する必要がある。

10. 襟を正す

4 行の二つ重なった格助詞「からの」、11-12 行の「大航海時代が目指す」という表現、20-21 行の「という」の使い方を見ると、著者の日本語力の高さが分かる。

さらに、漢字が多く使われている。きっと、「首っ引き」だったに違いない。自らを奮い立たせ、主張した。「土人、インディアン、ホロコースト、米州、拓殖、限界外」、勘違いではないかと思われる語の使用も、試行錯誤と努力

の結果だ。

「限界外、植え込む」は、著者の造語だ。Rodriguez（1608、ADVERTENCIAS 第2葉裏－第3葉表。ロドリゲス、1955、p.5-6）は、日本語は、言語要素を自由に組み合わせて、ヨーロッパの言語だと回りくどくなる言い方を、端的に表現できると述べている。著者も同じポルトガル語話者だ。日頃から、日本語の造語力に注目し、この作文で果敢に挑戦した。「本当に自由に」。

読めば読むほど、著者が費やした努力と時間が思われる。日本語に忠実に語を選び、文法を考え、そして、決意を持って、言いたいことを、言いたいように文章にした。その文章に触れることができ、幸せだ。

今までに添削してきた何百もの作文に思いを馳せる。私は、どれほど理解していただろう。もっと謙虚に、襟を正して、学習者に向き合おう。

謝　辞

作文を送ってくださった、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学文学部の萩野リカ先生、チアゴ・アブレウ先生、そして、掲載させてくださり、メールでの質問に心よく回答してくださった著者に感謝いたします。

「心に響いていたテーマ」を、日本語で書いてくれたことに感謝します。

本学部の「日本語教育特殊講義」は、3、4年生対象で、日本語学習者が書いた作文の誤用を分析している。この授業で、履修している学生たちから有益な指摘を受け、ここに反映した。合わせて、感謝いたします。

参考文献

1. 馬場良二（2019）「ブラジル・ポルトガル語話者の日本語作文の分析」、熊本県立大学文学部『文彩』第15号
2. 門脇薫、西馬薫（2014）『みんなの日本語　初級　第2版　やさしい作文』スリーエーネットワーク
3. Rodriguez, João（1608）*ARTE DA LINGOA DE IAPAM*, Societas Iesu
4. ジョアン・ロドリゲス著、土井忠生訳注（1955）『日本大文典』三省堂
5. Aurélio Buarque de Holanda Ferreira（2010）*DICIONÁRIO DA LÍNGUA PORTUGUESA*, Editora Positivo
6. 池上岑夫他（1996）『現代ポルトガル語辞典』白水社

7. 筑波大学日本語教育研究会編著（1983）『日本語表現文型　中級Ⅰ』凡人社
8. グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
9. 小矢野哲夫（2014）『日本語文法事典』大修館書店
10. 山田忠雄他（2016）『新明解国語辞典　第七版』三省堂
11. 新村出（1998）『広辞苑』岩波書店
12. 尚学図書（1981）『国語大辞典』小学館

注

i　FUNAI（Fundação Nacional do Índio、国立先住民保護財団）によると、1500年の先住民の人口は、海岸部で2,000,000人、内陸部で1,000,000人、1957年に底を打ち、5,000人と65,000人、2010年には、272,654人と545,308人となっている。激減したのは、殺害、強制労働、そして、文明が持ち込んだ疾病による。増えているのは、保護、および、同化によるものだろう。

ii　授業を担当したサンチアゴ・アブレウ先生によると、作文の提出は2017年の10月だった。

iii　「土人」という語で鮮烈に思い出されるのが、2016年の沖縄だ。抗議活動をしている市民に20代の機動隊員が吐いた。大阪の松井知事は、「間違った発言をすると、その人を特定し、鬼畜生、けだもののようにたたくのは違うと思う」と主張した。機動隊員は、動画に顔をさらしたし、叩こうとも思わない。ただ、「土人」は、死語だ。20代の機動隊員は、どのような経緯でこの語を知ったのだろう。誰が何のために、彼の目の前でこの語を口にしたのだろう。

iv　ブラジル先住民の部族名で、グアラニ、チクーナ、ヤノマミ、カインガンギ。響きそのものが、美しい。

v　「羽」は、漢字によって三つの形を持ち、「翼、翌」では「羽」、「戮、擢」では「羽」、「曜、濯」では「ﾖﾖ」だ。同じ「羽」だが、どの形となるかは、個々の漢字による。

vi　尚学図書（1981、p.1216）によると、「州」は、「洲」の代用で、「大陸」の意を持つ。

vii　著者に、メールで、「24行目「限界外」というのは、あなたが作った語だと思います。意味は、分かります。どんな気持ちで作ったのでしょうか。「周辺的」という語がありますが、「限界外」を選んだ理由は、何ですか？」と聞くと、返事があった。「「限界外」は確かに私が作った言葉です。「周辺的」という語は、そのとき、「外」の意味が感じましたが、それ以上の「外」が表示したかったです。それと、「周辺的」や「限界外」の発音のことです。「げんかいがい」を発音すると、KとGの音を繰り返したら喉に阻止のような何かがあります」。確かに、「周辺的」の [ʃu:] と [χen:] の音は、響きがやさしい。一方、ポルトガル語話者のガ行子音は、摩擦音化することがない。だから、「限界外」は、硬い（[geŋ:kaigai]）。「喉に阻止のような何かがあ」るというのは、[k] と [g] が軟口蓋の閉鎖音だからだろう。著者は、音声まで考えて、語を選

択していたのだ。

viii 「に、において」は、時を示す後置詞で、文体によって使い分ける。ポルトガル語では、前置詞「em」がこれに対応する。英語の「in」と同じで、ポルトガル語「em」も、文体によって使い分けるほかの形態というものは、ない。

ix João Rodriguez は、16、17 世紀の日本で活躍したイエズス会士で、日本語教師、通訳。ポルトガル語で書かれた日本語の文法書『*ARTE DA LINGOA DE IAPAM*』を著した。

x 語例として、「Yoriua. Yeno. Carani. Caraua. Yorino.」など、例文として「Cono Vrano fitobitoua saquini cara coconi atçumararete. Vocuyoriua itçuno vonoborizo?」などがあげられている。

xi 「da」は、前置詞「de」と定冠詞の女性単数形「a」の縮約形。

xii 日本語の文は、大きく判断文と描写文の二つに分けられる。判断文は、助詞「は」によって主題がマークされることが多く、描写文の動作主はガ格をとる。24 行の当該文が事実を記述する描写文だと考えれば、このままでいいし、著者はそう考えていたのかもしれない。ただ、インディアンについて述べている流れに、「インディアンが」がくると、唐突だ。「－のは事実だ」をくわえて、描写文であること、だから、「が」なのだということをはっきりさせなくてはならない。

xiii 山田（2016、p.131）、「うばう」の㊀。

xiv 「「近現代にその結果はなかなか社会に根深い」は、どうですか？」と提案すると、「そうです！「根深い」という言葉はわかりませんでしたけど、完璧です」ということだった。

xv 著者に提案すると、「「みなす」という言葉は初めてです！すごい言葉ですね。そう、「みなされるようになった」の方がいいと思います。」と返事をくれた。

xvi 尚学図書（1981、p.107）の「いいや」の項には、「〖感動〗相手のことばを打ち消す時に発することば」に続けて、「また、自分の話の中にはさんで強調する場合にも用いる」とある。

xvii 著者によると、「「このまま」は当時に悪い意味で「何年経っても何も変わらない」を言いたかったです」ということだ。その意図は、十分に言語化できている。そして、「この」を「その」に変えてもだ。

xviii Aurélio（2010、p.224）の「assim」の項を見ると、「Deste ou desse ou daquele modo（この、あるいは、その、あるいは、あのように）」とある。

xix 「文化、言語などが」は、「も」にすべきだ。